

学校評価を受けた検討事項について（集約）

※ 今後の学校機能の移転や、ここ数年で職員が大きく入れ替わり年齢構成も変化しているなどの現状を踏まえ、よりよい学校づくり（教育の充実、働きがいのある職場、信頼関係等）のための具体的な改善策を検討してください。

検 討 事 項		観 点	検討部署	当面の課題	具体的な改善策
学 校 運 営 の 視 点 か ら	① 全ての職員が自覚を持ち、主体的に学校運営や教育活動・業務推進に当たるために必要な職員の意識・体制・スキルアップについて	主体性と協働意識をもった職員集団の形成	各学部 各分掌	◎職員一人一人が心身の健康に対する意識を高め、健康な心と体で児童生徒に接することを徹底する。 ・長期間、同じ職にすることで、業務がマンネリ化し、次への引継ぎやスキルアップなどができず、業務への意欲の向上が難しい。	◎外部講師の活用やセルフチェック・テストの活用など、一人一人の職員が心身共に健康でいられるための方法に取り組む。 ・定期的に校内人事で、長期に同じ職に就かないようにし、まわしていくようにしてはどうか。
	② 病院との共通理解と連携・協力の在り方について	外部機関との共通理解・連携	各学部	◎職員が感染症を持ち込まず、また、学校・病院間の情報共有により、発生時の拡散を最小限に抑えることの徹底。 ・児童の体調に応じてではあるが病棟内での交流学習をしたい。 ・児童によって病院との連携が難しいように感じる。特にBS。	◎学校保健委員会等と連携・協力し、未然防止に努める。 ・ベッドサイドの連携については、窓口を担当とし、授業の様子や登校学習の様子等を随時報告しながら連携を深めていく。 ・学習を進めるにあたっての課題等を病棟と話し合う機会を設ける。 ・細かな報告、連絡、相談を心がけ、信頼関係を築くことができるようにする。
教 育 の 充 実 の 視 点 か ら	① 児童生徒が主体的・能動的に学び深めるための指導内容・方法の充実について	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒が主体的・能動的に学習を深めるために必要な学習環境、教師の過不足ない働きかけ(言葉、課題提示、支援、教材・教具その他)の在り方 児童生徒が進んで本に親しむとともに、知的好奇心を刺激し、主体的な学びを育むために必要な環境と指導の在り方 児童生徒の将来の夢や卒業後(進学や生活)に向けた学習指導への取り組みの充実（※キャリア発達を含む） 	各学部	<ul style="list-style-type: none"> 教員の欠員や出張などで担当する教員が変わるなど、補欠の体制が続いている。児童が混乱せず主体的に取り組むことが出来るよう、同じ教材を使用したり、指導の中での言葉かけ等の引き継ぎをしても、継続した指導が難しい場合がある。 一人の生徒に対して複数の教員が学習を行う様子が多く見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> 教員間の正しい共通理解や指導の統一のもと、ベッドサイドの授業の充実を図る。 学部内で補欠体制が組めるような人数配置を希望する。 過干渉にならないようにST、MTの役割を明確にし、できる限り少ない教員の人数で対応できないか指導体制を検討する。
			各学部 生徒指導部	<ul style="list-style-type: none"> 本に親しむ時間が足りず、読書につかう時間の設定が難しい。 	<ul style="list-style-type: none"> 学級や児童生徒の実態に応じて、休み時間などを活用し、読書に取り組む時間を設定する。
			総合支援部 教務部 各学部	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の将来の夢やなりたい姿が具体的に描けず、教員にとっても、この学校独自の子どもたちの将来の選択肢がわからない。 	<ul style="list-style-type: none"> 卒業後も病院で生活する生徒も多いが、大学に行った生徒の事例や家庭に戻り在宅で仕事をしている生徒など卒後の具体的な進路や生活を教員間で知る場をつくる。 児童生徒や保護者に卒業生の卒後を知ったり、聞いたりする場を設定し、小学部、中学部のうちから将来のビジョンが見えるような指導を行っていく。
② 児童生徒が自己理解を深め自己肯定感を育み積極的に生きようとするための適切な指導や心理的ケアの充実について	児童生徒理解と信頼関係	生徒指導部 保健体育部 (養護教諭) 各学部	<ul style="list-style-type: none"> 自宅や家族と離れ、入院することで寂しさや孤独感などを持つ児童生徒がいる。 生きる目標となる将来の選択肢が不透明。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒との間に信頼関係を築き、自分自身が周りから必要とされている気持ちを持たせていく。 子どもの特性やスキルを活かした将来の選択肢を提示し、その目標に到達するためにはどのような手段や課題が必要なのかを早い段階から指導して生きる目標につながるようにしていく。 	
③ 児童生徒に向き合い指導に携わる職員一人一人の専門性の向上について	病弱教育に関する理解	研究部 各学部	<ul style="list-style-type: none"> 重度重複の児童生徒の理解について 自立活動の授業プラン、進め方。 TTの指導、役割 「からだ」の時間の充実 病弱教育の理解については、道内での病弱教育に関する学校が少ないため、他校と連携し、協力体制を作ることが難しい。 研究授業が多く、一つ一つの授業に丁寧に向き合い、専門性を向上させるまでに至らなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 重複の児童生徒に対する「自立活動」のカリキュラムを実際に考えてみる。 研修体制の充実 日々の授業にすぐに活かせるような指導のヒントやアドバイスをもらい、一人一人の授業力向上を目指して、一人ずつビデオなどを撮って課題や困り点を提示し、学部で検討する時間を設定する。 他校の実践や研究について研修会等の機会を利用して知る。 	

※ これらの内容を新年度の運営計画に生かし、よりよい学校運営に取り組む。